



# はた 機を織る

## 1. はじめに

衣食住は生活様式の重要な部分ですが、衣生活に限ってみると衣料（原料）の獲得に多くの労苦が払われてきたといわれます。日本人の衣生活の伝統を支えてきた衣料のほとんどは、生物から得てきました。動物から得られるものは、蚕のマユから取れる天然の絹が最も多く、他には猪・鹿・熊など獣の毛皮が何ほどかあったようです。そして衣料のほとんどは植物から得ています。麻・藤・科・イラクサ・藁・綿などを利用してきたようで、その歴史は草木の繊維は縄文時代から用い、絹は弥生時代から概ね用いられていたであろうと考えられています。ただし、綿の利用については江戸時代に入ってから一般に普及したといわれています。今日の化学繊維出現以前の日本人の衣料は、およそこのようなものを利用して暮らしていました。

今回の話は、これら衣料の中で綿を用いた繊維＝木綿に関するものです。特に近江にあって湖南地方（栗東町金勝地区）を中心として、村の女性がいかにして夫、子ども、家族の衣服を手に入れてきたかを考えてみようとするものです。村に生まれ、村で育ち、村で暮らしてきた女性たちの一面を顧みようと思います。

## 2. 四季のうつろいと女性の仕事

今から30年ほど前までに農家へ嫁いだ多くの女性たちは、花嫁道具のひとつとして手織りの着物を箆笥に入れて嫁入りしました。また、「ソナ

エバタぐらい織れなければ嫁においてもらえない」と言い含める母親もあったそうです。ソナエバタとは、織る準備が整っている機のことです。織った布はふだん着る着物として仕立てられるため、機織りができ服を仕立てられることが、農家の嫁・主婦として一人前の条件とされることもあったようです。そのため花嫁修業として裁縫を学んだり、ハタシャ（機織りの上手な方）のところで機織りを教わったりと農作業で忙しい時期であっても、自給自足を建前とした村落生活の中では当り前のこととして受けとめられていたようです。

一般的に機織りは、12月から3月にかけて行なわれました。滋賀県にあって比較的温かい湖南地方では、農閑期であっても山行き・裏作（麦・菜種など）の作業と同時に機を織るといった多忙な毎日だったそうです。一年を通じて立ち働く農家の女性にとって、機織りはけっして特別なものではなく生活の一部として考えられていました。そこには、

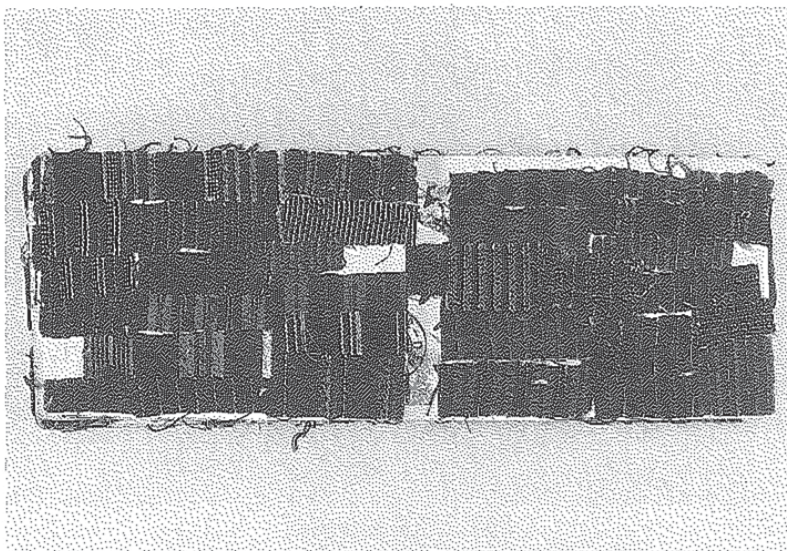


高機で浴衣地を織る

“少しでも暮らしの足しになるように”という今も昔も変わらない主婦の経済感覚にもとづいて、機織りが行なわれ受け継がれてきたのです。しかし、農家の女性すべてが機織りをしていたわけではなく、依頼して作っていただくこともあります。こうした場合の注文先はハタシャとなります。手先が器用で織り上げる縞柄も豊富で美しく仕上げられる女性が、ハタシャと呼ばれました。ハタシャは織りの基本は母や姑から学びますが、やがて独学で技を磨いていったそうです。そしてハタシャは、村の機織り教師としての一面も併せ持つこととなります。ハタシャの織り上げた布は、表面に凹凸がなく目も詰まっていって一見して素人の織った布と区別できます。また複雑な縞模様や<sup>かすり</sup>縞なども自在に織り上げるため、当然のことながらハタシャのもとへは嫁入りに必要な衣服の注文が殺到することになります。一般の女性は農閑期に機を織りますが、ハタシャは一年を通して機を動かし、また農作業もこなすという極めて多忙な毎日を送りながら、一家の家計を預かる主婦として、また貴重な現金収入を得る働き手として重要な位置を占めていました。ハタシャの高い技術は、日常生活を支えるたくましさと同時に自給自足生活を基本とした暮らしを支える原動力でもあったわけです。こうしたハタシャ

の高い技術を示す資料に「<sup>しまみほんちよう</sup>縞見本帳」があります。通常この見本帳は、自分で織った縞柄を残したり他人が織った縞柄をいただいて貼り付けて残すもので、切れ端がたくさん絵ハガキやノートに貼り付けられています。それら縞柄の多くは<sup>たてじま</sup>経縞を基本としていますが、ハタシャのものは分厚く豊富な縞柄が見られます。大縞（若者向き）、メクラ縞（中・高年向き）、フトン縞、<sup>あわせ</sup>袷縞（夏以外の柄）、<sup>ひとえ</sup>単縞（夏の柄）、糸入り縞（外出着）などは当然のこと縞模様など素人の見本帳にはないものが多く含まれています。

栗東町の金勝地区では、昭和30年代後半まで主婦たちによって機織りが行なわれてきました。用いていた機は、タカハタ（高機・カンバタとも称す）でもボタンを伴っている機種で、明治後期以降普及して一般家庭に入ってきたものです。それまでは、高機でもボタンを伴わないものやジバタ（地機・シモバタとも称す）が使用されていたようです。特に栗東町での地機の使用は大正時代にその役目を終えていたようです。急速なボタンを伴う高機の普及は、反物の増産にもつながったようです。それは<sup>よこいと</sup>緯糸を通すヒ（杼）を比べてみるとよくわかります。地機では57センチ前後の大型のもので織り幅以上あり、緯糸を一本通してはヒで打ち込むという方法であったため、一反織り上げるのに3日から4日かかったそうです。それにくらべボタンのついた高機では、綱を引くことによりヒを左右に移動させ、ヒ自体を手で持つことができなくなったため緯糸を打ち込む回数が飛躍的に増え増産されたことがわかります。それによって一日で一反織り上げる女性もあったといわれています。ただ、高機でも相変わらずヒを手で受け取るナゲビ形式の高機が使用された時期もあったようです。栗東町での機の変遷は、概ね地機一ナゲ



縞見本帳

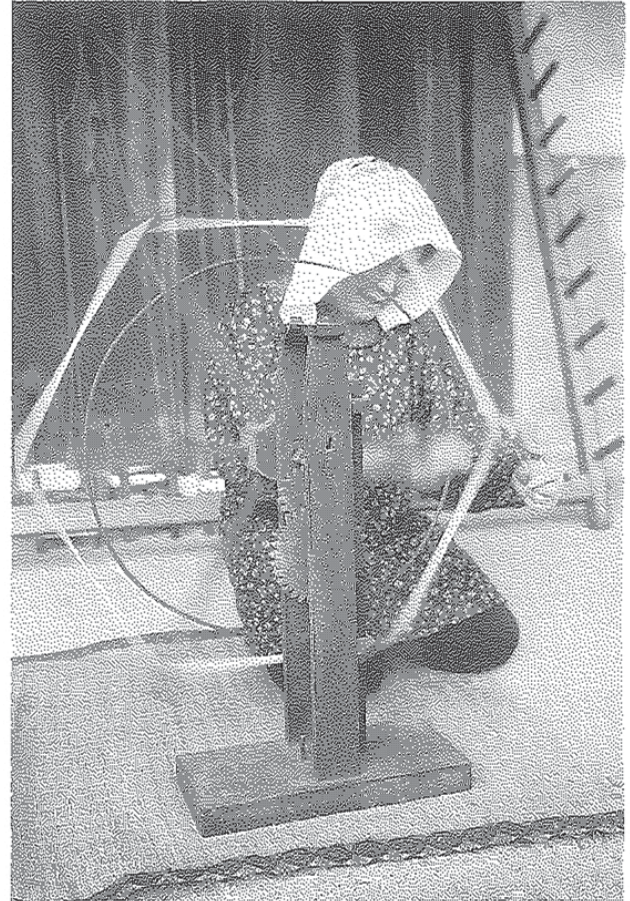
ビ高機—ボタン高機へと変化していったことが考えられます。しかし、一方では地機を遅くまで使用していた所もあつたり、明治中期にはすでにボタン機を使う所もあつたりと一様ではなく、織り手の技術に合わせてたり織る模様に合わせて機を購入・改良していったことを窺い知ることができます。

### 3. 機織りの再現

それでは、今から50～60年以前に行なわれていた実際の本綿機の機織りを工程順に見ていきましょう。この再現は、一般農家で繰り広げられていた機織りの復元工程であり、地場産業にみられるような分業体制や製品として出荷することを前提としたものではなく、あくまでも自給自足を目的として家族の衣料を得るために行なわれた機織りの再現です。こうした再現過程では、その地方に古くから残る紡織技術や新しく導入された技術や道具が一体化しており、人々の知恵と工夫を垣間見ることができます。

#### 1) 綿の栽培

近江にあって綿の栽培がいつごろから始まったのかはっきりした記録はありませんが、すでに江戸時代には湖南地方で綿の栽培を行っていたと考えられます。しかし、近江の



カセグルマを用いてカセ糸をつくる

湖北・湖東・湖西北部は綿の栽培があまり普及しなかったようで、近江上布に代表されるように麻を中心とした紡織技術が浸透し、麻織物を産することで全国的にも知られ、江戸時代初期には近江を代表する産物として挙げられています。滋賀県内にどの程度綿栽培が普及していたのか判然として

いませんが、今後の調査・研究にゆずるとして、栗東町内では春5月初旬ごろからやせた土地で日当たりと水はけのよいところを選んで種し、9月上旬に採取していました。

#### 2) 糸をつくる

採取された綿は、まず天日乾燥します。これをワタクリキにかけ綿と種に分けます。このワタクリキには二種類あることが知られていますが、大部分は小型の座って使用する

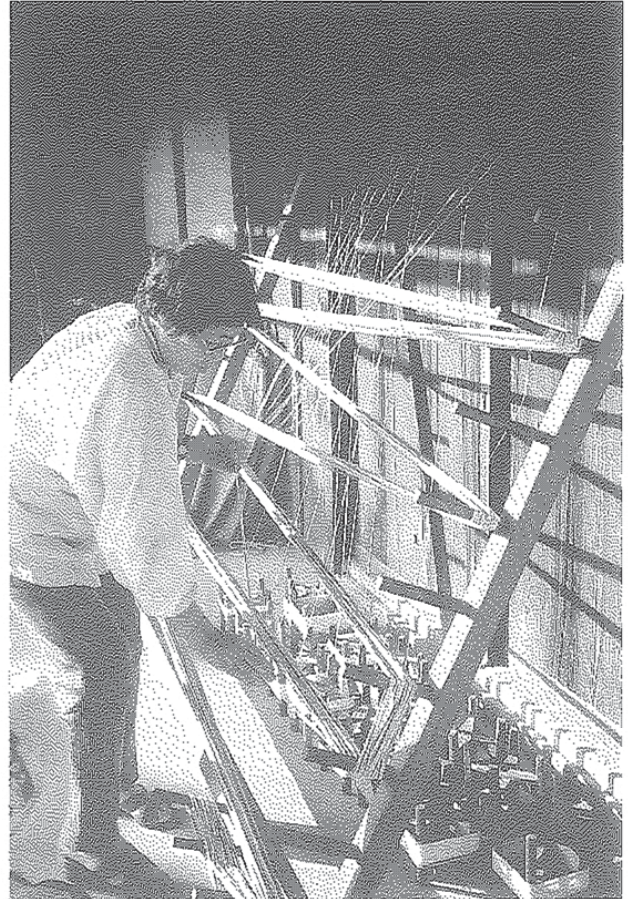


ワタクリキで綿と種をわけ

るものです。実綿となった綿は、次にワタウチユミによってほぐします。この作業を個人ですることとはほとんどなく多くは綿屋か布団屋に持ち込んで、専門の綿打ち職人にしていたそうです。打たれた綿は、アメボウとよばれる棒状にまとめられ少しずつつまみ出してひっぱりるようにして細い糸にしますが、この時にはイトノベグルマを用いツム（紡垂車）に10センチほどの竹の管を差し、そこへ撚りをかけながら巻き取っていきます。こうしてできたものをタマとよびますが、この作業はたいへん熟練を要し、素人ではなかなか均一な糸にはならなかったらしく、戦前までは行なわれていたようですが多くはすでに販売されていた糸を購入していました。

### 3) 糸を整経する

タマはいくつも作られ、次にこれをカセ糸にします。左手でタマに棒をさして持ち右手でカセグルマを回転させ巻き取ります。タマは次々とつなぎ合わせ一本の糸にしますが、カセグルマには3～6尺の寸法ごとの大きさがあり使い分けていたようで、栗東町では5尺ガセが標準的に使われていました。カセグルマは、40回転すると合図がなるような細工がなされ、これをヒトヒビロとしてまずくりします。5ヒビロで1カセとし、13カセで約一反分の経糸が準備できます。次に別のカセイトを糸枠へ移し換えます。イトマキダイに糸枠を固定し必要な分を巻き取りながら使用するオサ(箆)の目数と織る縞模様を考えるわけです。通常手で紡いだ木綿糸は、七ツ半から九ツのオサに通されます。購入した精練糸はもっと目数の多いオサが使われます。浴衣地を織る場合などは、八ツ半くらいのオサを使います。一ツは40羽として $40羽 \times 8.5 = 340$ 羽(目数)となり、仮に15個の糸枠を用意したとすると $340 \div 30 = 11$ 縞となり残りの10羽は最後に足すこととなります。オサ1羽には上糸と下糸の2本が通されますから $340羽 \times 2 = 680$ 本の経糸が準備されることになりま

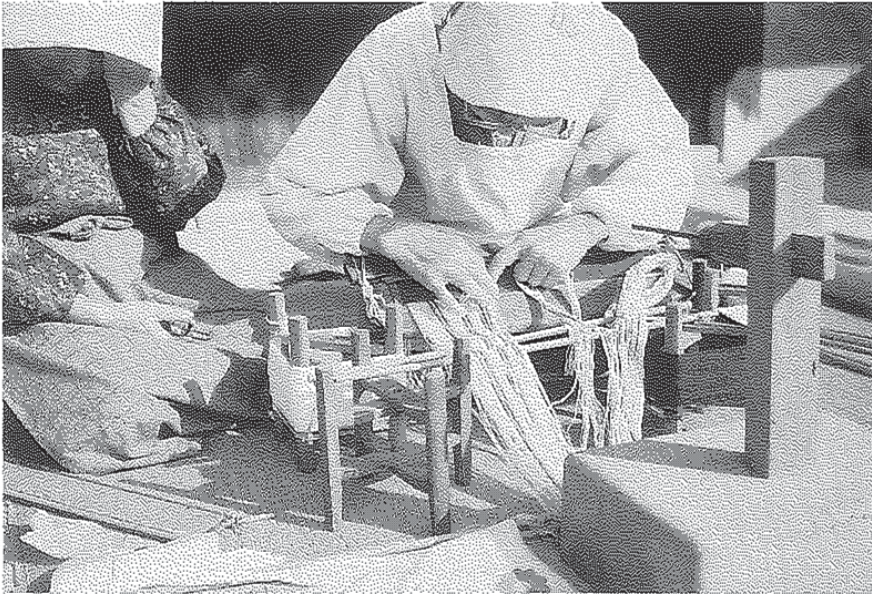


ヘイダイで糸を整経する

す。このためには、糸枠からアナダケの穴に糸を一本ずつ通してひとつにまとめヘイダイに一反分の経糸として整経されるわけです。こうして用意された経糸は、オサの一羽ずつに通し、ヘノイト(綜統)がかけられます。

### 4) 機へあげる

オサ通しの完了した経糸は、チキリ(千切)に巻き取られた上でヘノイトが上糸・下糸の両方かけられます。購入した綜統を使用してもよからうと思われませんが、栗東町では古い時代から伝えられてきたと思われる方法でヘノイトをかけています。まず、70センチほどの竹を松葉杖状にしたところへ上糸・下糸とも一本ずつひろってはヘノイトを8の字状にかけます。680本の経糸すべてにかけます。ですからなかなか根気のいる作業となります。こうした上でナカワクとよばれる棒が2本差し込まれ、上糸と下糸を常時開口させておきます。この方法は、地機を使用していた時代から受け継がれた紡織技術のひとつと考えら



オサに経糸を通す



経糸にヘノイト(綜統)をかける

れます。

#### 5) 機を織る

以上の作業を経てようやく機へあげて織りすすめるわけですが、オサはオサカマチ（オサを固定するもの）が固定されたバツタンに取り付けられ、次にヘノイトが連結されます。開口部（緯糸を打ち込むために経糸を上下させたところ）をつくりだすためには、少し変わった方法がとられます。2本あるナカワクのうち1本を左の踏み木に連結させ、もう1本は機上部のロクロにかけて下糸を上へ引き上げるヘノイトに連結させると同時に右の踏

み木に上糸を下へ引き下げるように連結させます。このような開口部の作り方は、地機にみられるような単純で素朴な方法とみることができます。このようにして織る準備ができるとバツタンの中に管に巻かれた緯糸をヒに収め、ツナビキのやり方でヒを左右に移動させながら打ち込んでいきます。ハタシャなど熟練した女性は、ヒを移動させるために一度綱を引き、バツタンを前へ引いて一度打ち込む手慣れたリズムで一日一反織り上げてしまったそうです。しかし、一反織るには一般的には2～3日かかってしまうのが当たり前だったようです。

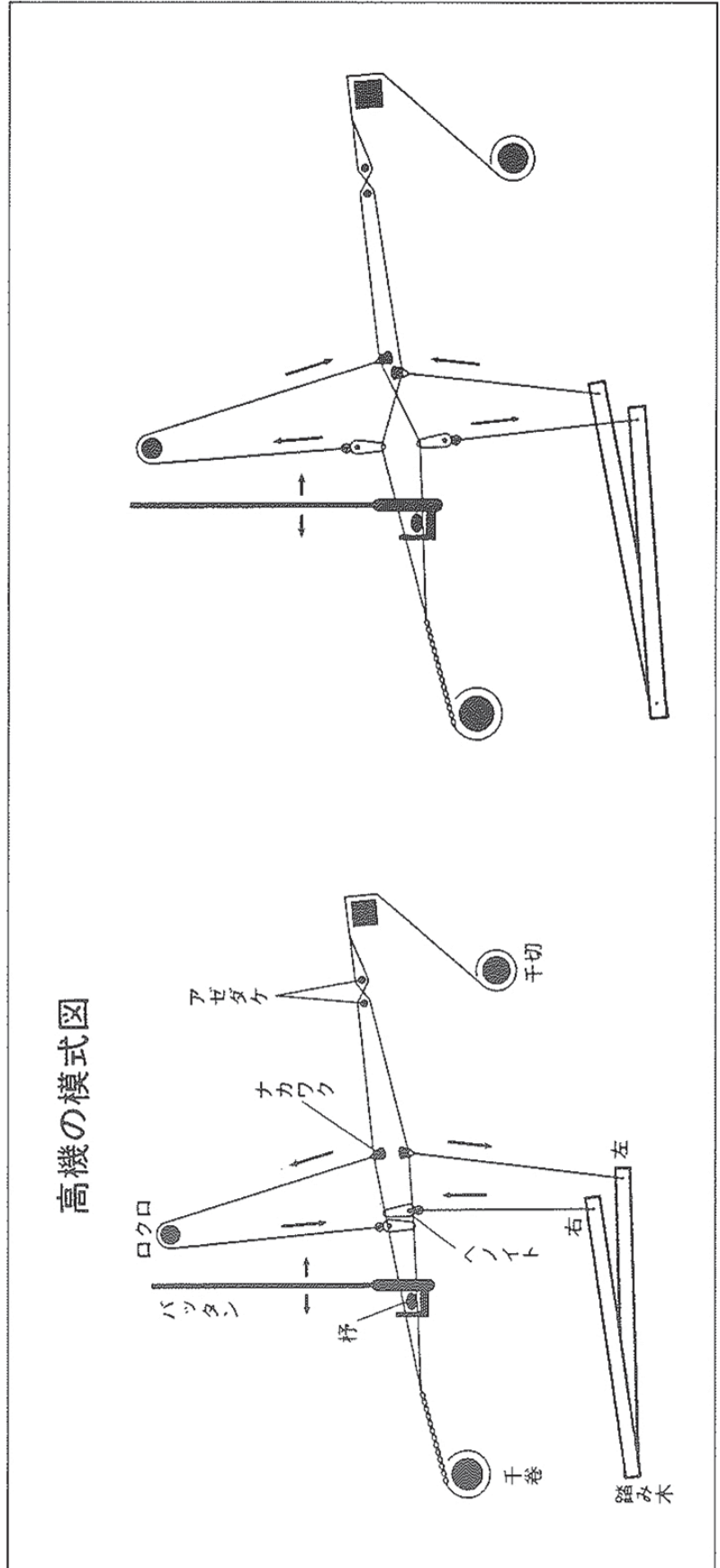
#### 4. まとめにかえて

機を織るための紡織技術は、永々として日本人の生活の中で女性たちによって受け継がれ、現代にまで伝えられてきた衣料を得るための手段でした。しかし、明治時代以降の殖産興業化の波は、民間で継

承されてきたこれらの紡織技術を一変させたとされています。家庭の中で行なわれていた機織りは工場へと様変わりし、まさに「野麦峠」にみられるような大規模生産体制へと移行していきます。それに伴って織機しよつきが導入され、分業体制が確立します。京都・西陣織りなどはその典型と考えられます。しかしながら、手織りの木綿布を知っている方は、汗を吸収しやすく温かく、それでいて通気性がよく耐久性もある手織り木綿を大切に保存しています。今となってはもう一度織ってみたいと請う方もいたり、自分で織って楽しんで

おられる方も大勢います。

また、復元した機を構造的にみると、栗東町内で用いられてきた高機にはふたつの特徴が認められます。それは、高機であるにもかかわらず地機で使用されるナカワクとよぶ道具を使うこととヘノイトも地機で使用されるものであることです。使用されていた機台は、広く一般的に普及した「大和機」に分類されるものですが、機台にかけられた経糸を常時ナカワクによって開口させている点から考えると、地機を使用していた時代の名残りとしても決しておかしいとはいえません。つまり、地機と同様に常時開口部を設け、ひとつのヘノイトで下糸を引き上げ、折り返した開口部をつくる地機で使われていた方法で織るという最も単純な方法の発展型とも考えられるのです。しかし、一方では明治時代に普及したボタンを用い生産力を上げているなど古い時代と新しい時代が同居している機ということもできます。こうしたことは、母から娘へそして孫娘へと繰り返し伝承されてきた伝統的な技術を大切にしながら、よりよい衣料を求め新しい道具・技術を探した往時の女性たちの姿を垣間見るようです。残念なことです。このように機を織ってきた女性たちが少なくなり、当時の紡織技術がだんだんと聞けなくなっていることは否めない事実です。忘れ去られる前に少しでも記録し、後世に伝える努力は必要ですし、またそうあるべきと信じます。（明珍 健二氏 提供）



高機の模式図